

## 1 調査の概要

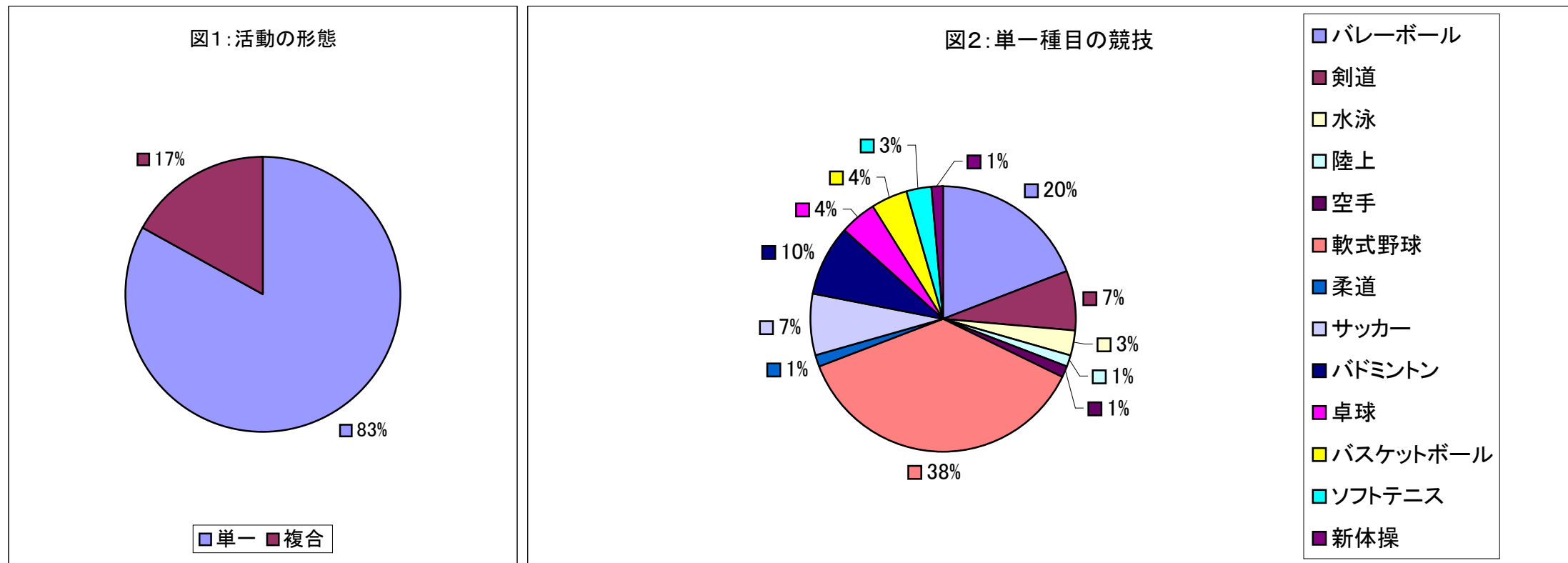
- (1) 目的 本県スポーツ少年団活動の実態を把握し、今後の望ましい少年団活動を実践するための基礎資料に資する。
- (2) 対象 平成19年度日本スポーツ少年団登録団
- (3) 調査期間 平成19年12月1日～平成20年1月31日
- (4) 回収状況 配布 183団 回収 82団 回収率 44.8%
- (5) 調査内容 別紙 調査内容参照（最終ページ）

## 2 調査結果の概要

### (1) 活動の形態 【図1・図2】

活動形態は、単一種目が83%、複合種目が17%となっている。  
単一種目の競技では軟式野球が38%で最も多く、次いでバレーボール、バドミントンと続く。

**【考察】** 全体的に単一種目傾向であり、競技種目では全国交流大会のある軟式野球・バレーボール・剣道が上位を占めている。



(2) 大会、遠征等への参加 【図3・図4・図5・図6】

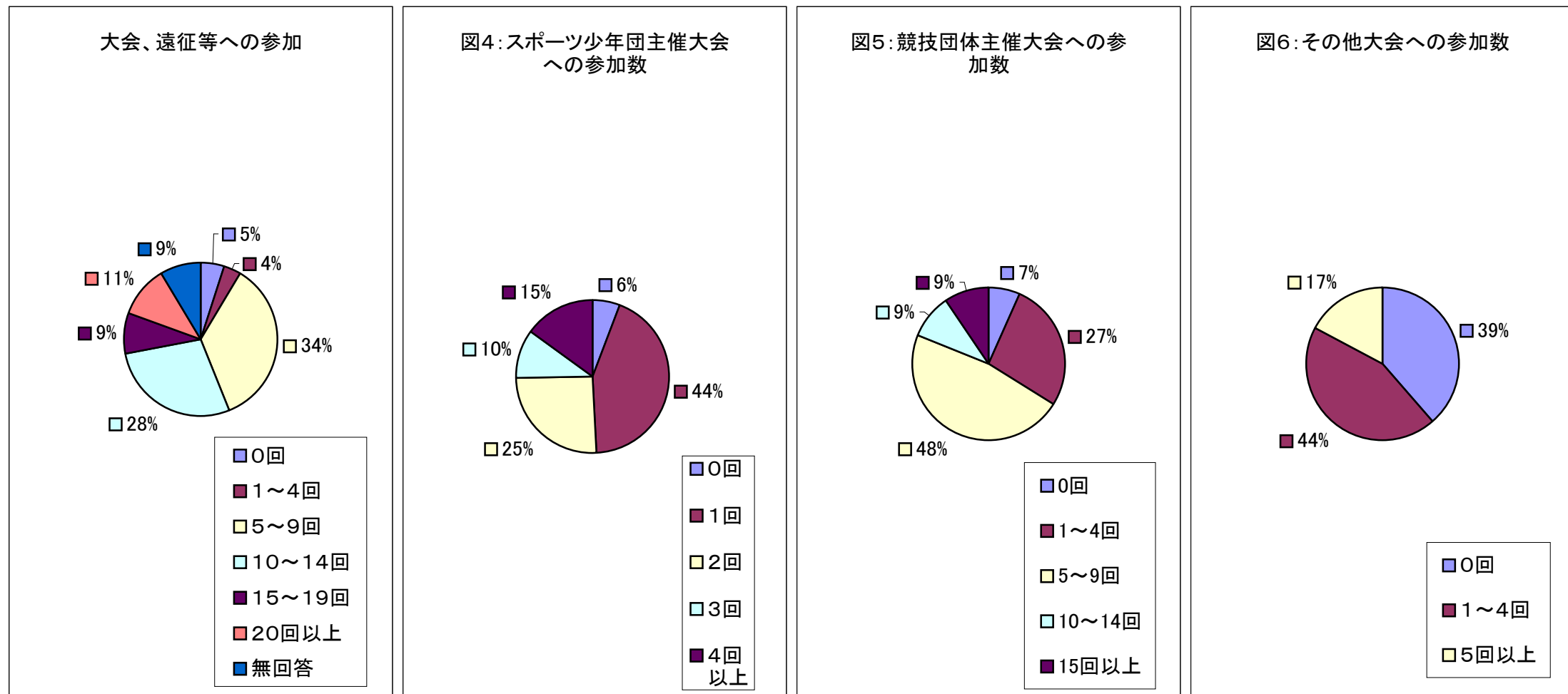
年間の大会参加回数は、「5～9回」が34%と最も多く、次いで「10～14回」が28%ある。

また、「20回以上」は11%になっている。

なお、20回以上のうち40回と回答したのが1団あった。15回以上の参加が多かったのはバレーボール、剣道、バドミントンだった。

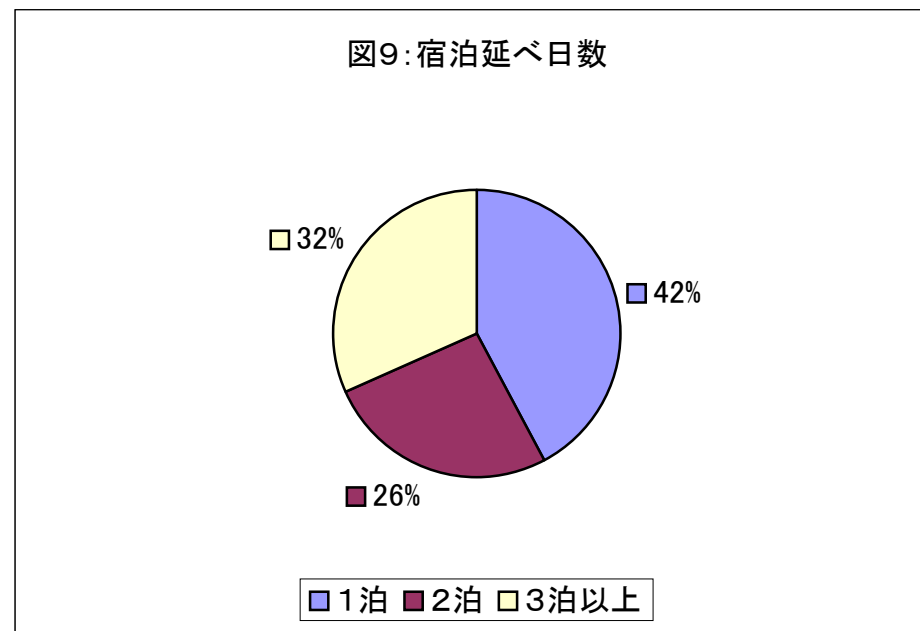
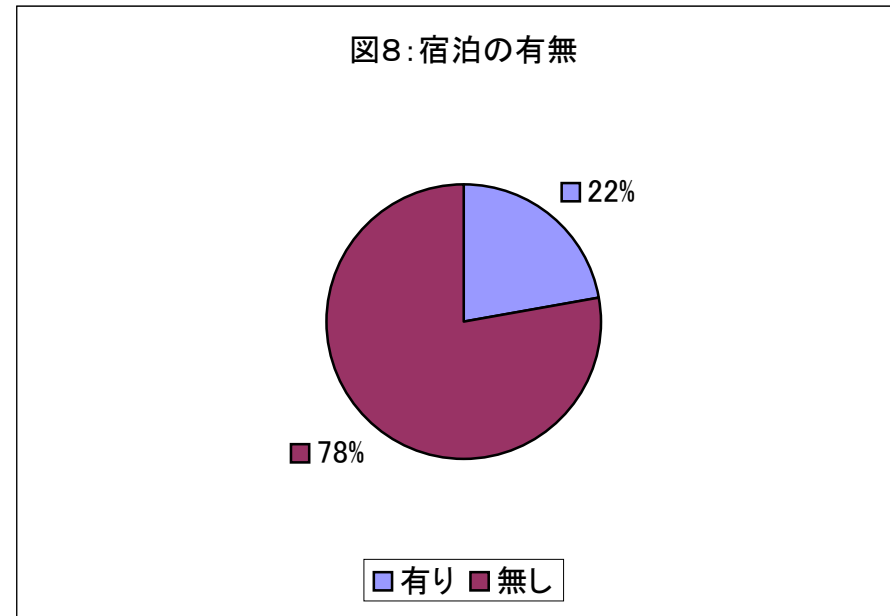
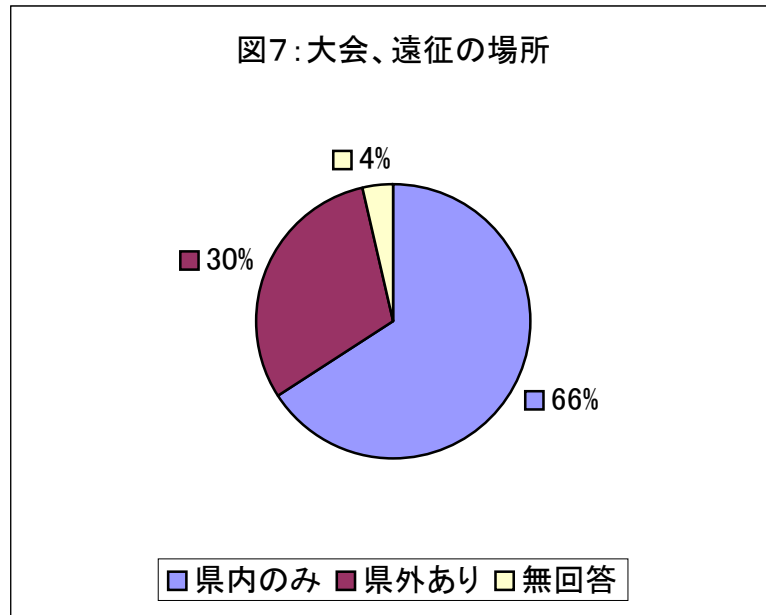
主催の内訳では、スポ少主催の大会に加え、競技団体主催、その他の大会への参加がある。

**【考察】** 年間の大会・遠征等への参加は15回までが6割を占めるが、1ヶ月3回程度のペースで参加している団もあるようだ。スポーツ少年団主催のものよりも、競技団体主催やその他の大会への参加がおおい。



(3) 大会参加に関する場所・宿泊について 【図7・図8・図9】

参加する大会は66%が県内のみであり、30%が県外への参加もあると回答した。  
県内、県外を含め、大会参加の際に宿泊を伴う場合が19%、その内延べ3泊以上が25%ある。

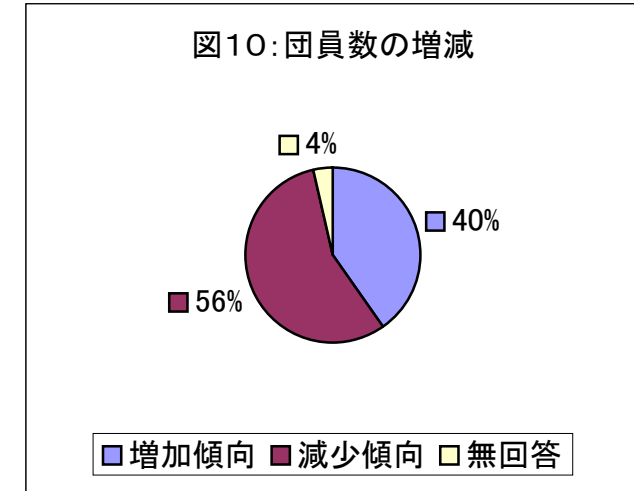


#### (4) 団員数の増減 【図10】

56%が減少傾向、40%が増加傾向にあるとの結果が出た。  
なお、「横ばい」「増減なし」等の回答は無回答とし4%となっている。

減少傾向の理由としては、「少子化の影響」が最も多く、そのほか「子どものスポーツ離れ」「興味が無い」「他のスポーツ・習い事が人気」「保護者の理解がない」等がある。

**【考察】** 団員の登録数は少子化の影響も含め、減少傾向にあるといえる。交流大会に参加が難しくなるほどの影響を受けている団では低学年からの入団を積極的に行うなどし体策を試みているところもあるようだ。

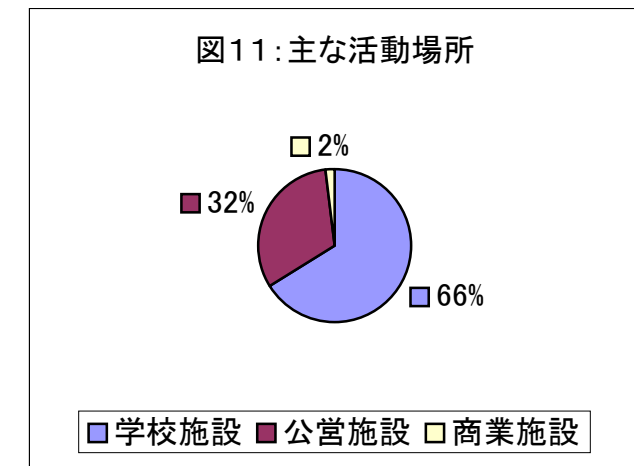


#### (5) 活動の実態

##### <主な活動場所> 【図11】

主な活動場所とは普段の練習や集まりの場所であり、学校施設が多く66%と過半数を占める。公営施設を使用している団は32%、商業施設は2%となっている。

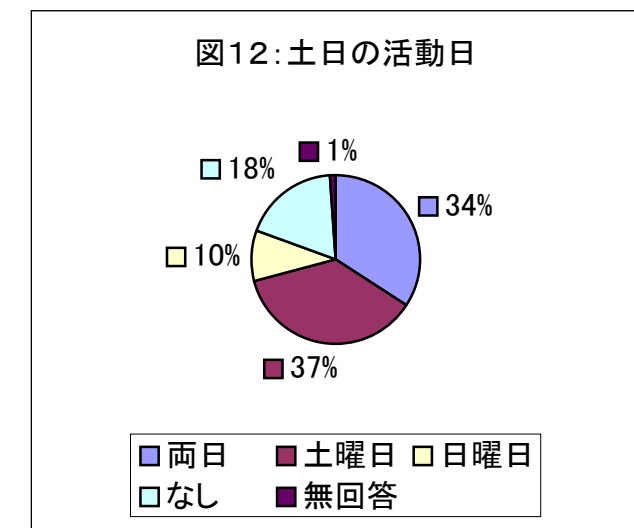
**【考察】** ほとんどが学校施設であるが、使用限度や他の使用者との調整も難しいようだ。商業施設を使用する団は少ないものの、活動場所確保に苦勞する団もある。



##### <土日の活動日> 【図12】

両日活動を行っているのは34%ある。  
「なし」の回答は土日とも活動をしていない団で18%ある。

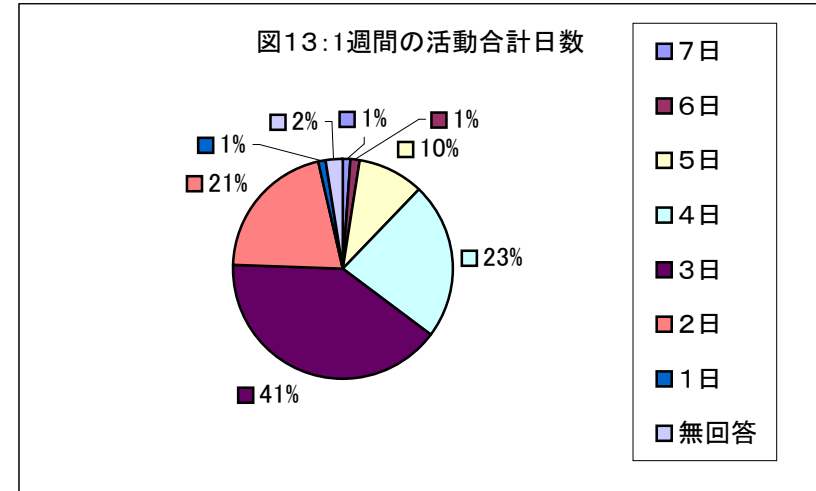
**【考察】** 両日とも活動を行わない団と、土日どちらか一方でも休みとしている団を合わせると、65%あり、休みもきちんと取っている団が多い。  
両日活動している34%の中には、大会等も含まれているため、練習のみというわけではない。また、「なし」の両日とも活動をしていないと回答した団の中には、大会の前日やイベント開催時には稀に活動をするということもあると答えた団もあった。



<週の活動合計日数>【図13】

週に活動する日数合計は、3日と回答した団が最も多く41%あり、次いで4日の23%、2日の21パーセントと続く。  
また、単一種目の団で、最も多い日数は5日で10%あった。

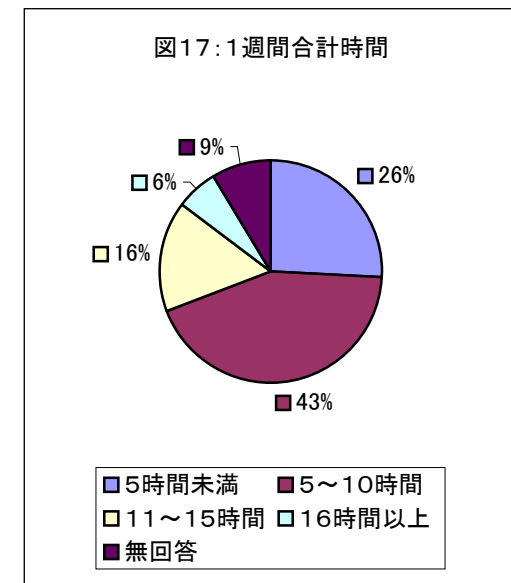
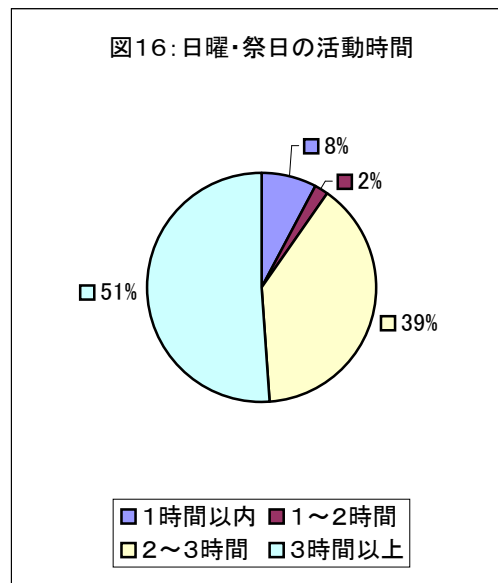
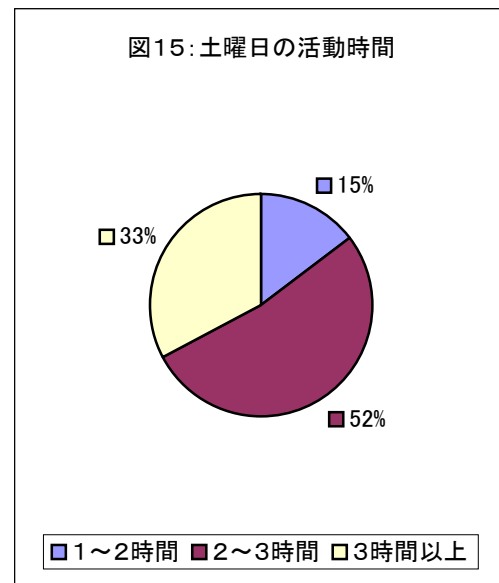
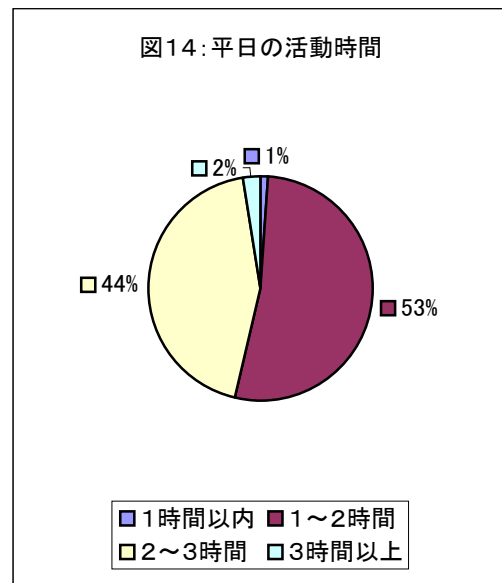
**【考察】** 週に2日から4日の活動をしている団がほとんどであり、数字を見る限りでは良い傾向だと感じる。  
なお、6日・7日と回答したのは複合団であるため、実態を必ずしも反映していないと考えられる。



<活動時間>【図14・図15・図16・図17】

平日の活動時間は1～2時間が53%、次いで2～3時間が44%あり、97%が3時間以内である。  
土曜日の活動時間では2～3時間が半分を占め52%ある。  
日曜日の活動時間では3時間以上が半分を占め51%ある。  
1週間の合計時間は、5～10時間が最も多く43%であるが、中には16時間以上の回答もあった。

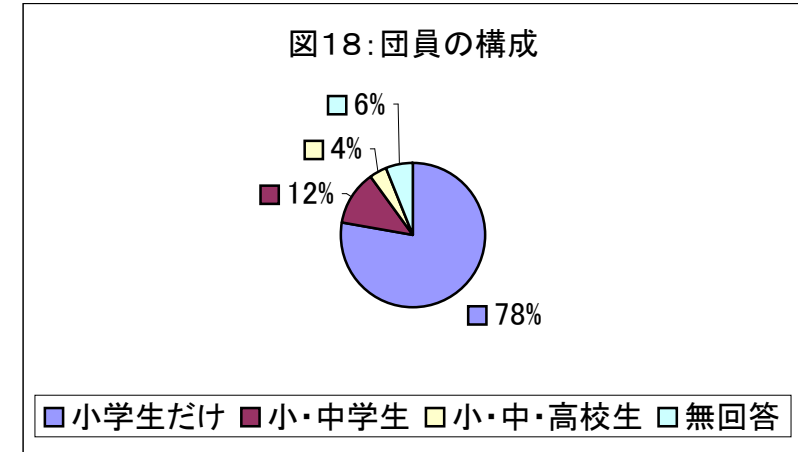
**【考察】** 平日の活動時間帯は5時～7時を中心に30分ずつずれたスケジュールが多く、ほとんどが2時間～3時間の活動である。  
ある団では午後9時30分まで活動していた。ただ、1週間に2日程度の活動団であるため、練習時間確保にはやむをえない状況であるといえる。  
また、週の合計時間が16時間以上の団は、土日を使って1日4時間程度（半日）の活動をしているようだ。  
休み明けの学校生活に影響の無い程度の活動を心がけてほしい。



<団員の構成>【図18】

団員の構成は、小学生のみを入団としているところが最も多く78%ある。高校生までを登録している団は4%と少ない。

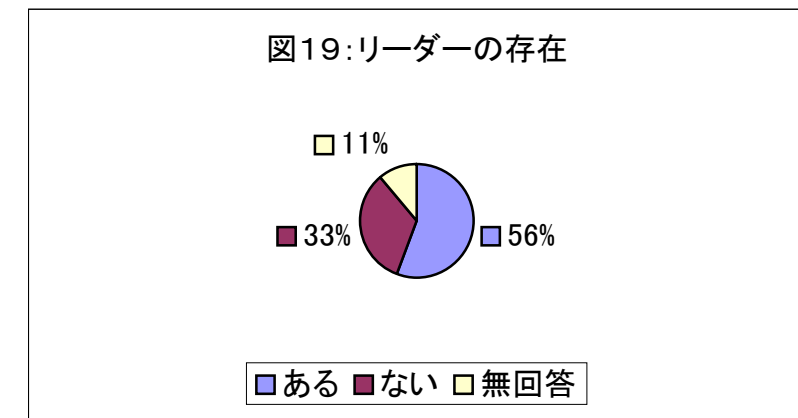
**【考察】** 中学校へ上がったからの活動の難しさが窺える。中学校になると、部活動が始まりなかなかスポーツ少年団活動に参加できないという意見があった。中・高校生が少ないため、指導者と団員の間存在的存在である少年団特有のリーダーの存在としての活動はほとんどない状況である。



<リーダーの存在>【図19】

単位団でのリーダーの存在は「ある」の回答が半数以上の56%あった。

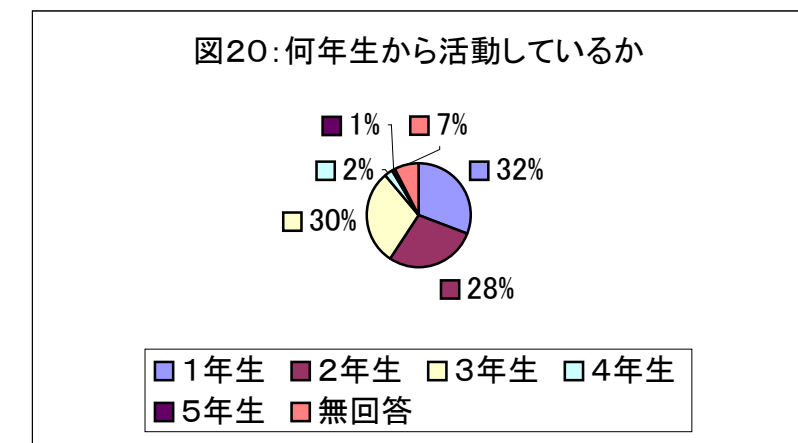
**【考察】** リーダーとは、スポーツ少年団特有の「単位団活動しながら少年団員のまとめ役や指導者の補助的な存在となる団員」をいう。日本スポーツ少年団では、小学校を卒業後、中学・高校でも団に在籍し、リーダーという役割で活動することが重要だとしている。集計結果では「ある」が56%と過半数を占めているが、リーダーを「キャプテン」等のリーダー的存在と解釈しているところもある。



<何年生から活動しているか>【図20】

入団の学年では、「1年生から」が32%、「2年生から」が28%、「3年生から」が30%あり、3年生までで90%を占める。

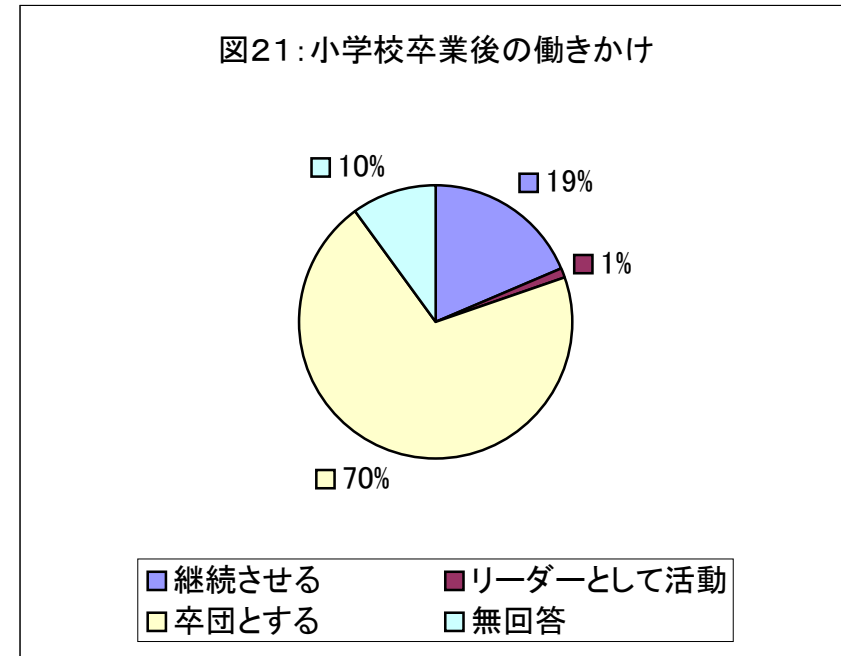
**【考察】** 集計結果では、小学校低学年からの入団が多いという結果が出ている。しかし、中には低学年は活動はさせているが登録はしていないという団もあり、必ずしもこの数字とは限らない。低学年を入団させることについては、活動をする上で難しいという意見もあるが、低学年から体を動かすことの楽しさを学んだり、社会活動などを通して人と人との交流等を経験することは大切なことなので、活動内容を工夫し、是非低学年から入団・活動をするようにしてほしい。



＜小学校卒業後の団員への働きかけ＞【図21】

小学校卒業後は卒団としているのが70%と非常に多い。  
継続をさせている（勧めている）とう団は19%となっている。

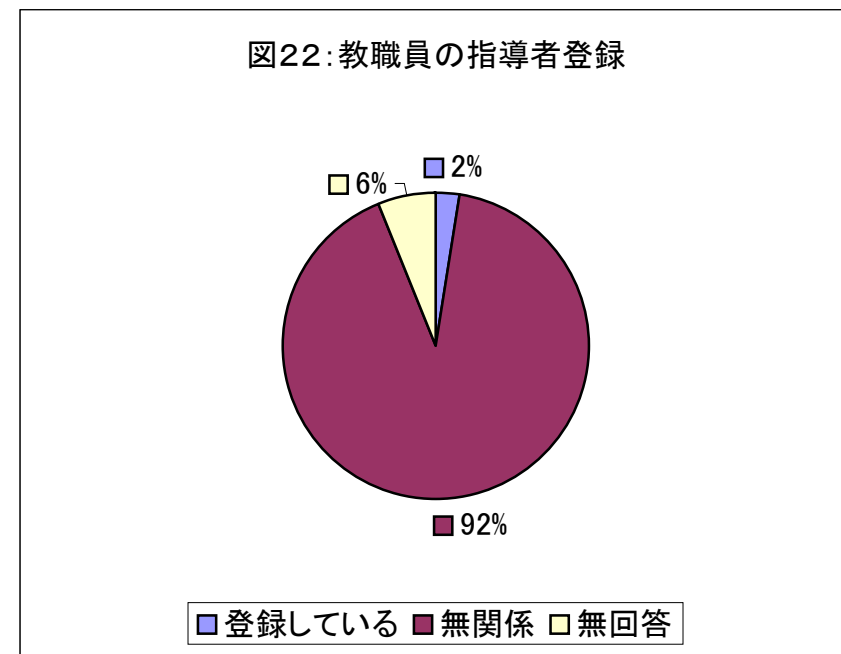
**【考察】** 中学校に入ると部活動に入部し、塾や習い事も増えとても少年団活動をしている暇がないという意見がある。  
もともと小学生を対象として団を作っていて、「卒団」があたりまえであり、中学生以上を団員として継続させるという意識はないのではないだろうか。  
団員として活動していた場所で、運営や指導の手伝いをしていながら、将来の指導者として育成することも大事な活動ではないだろうか。



(6) 学校との関わり  
＜教職員の指導者登録＞【図22】

教職員が指導者として団に関わっているのは2%と非常に少ない。

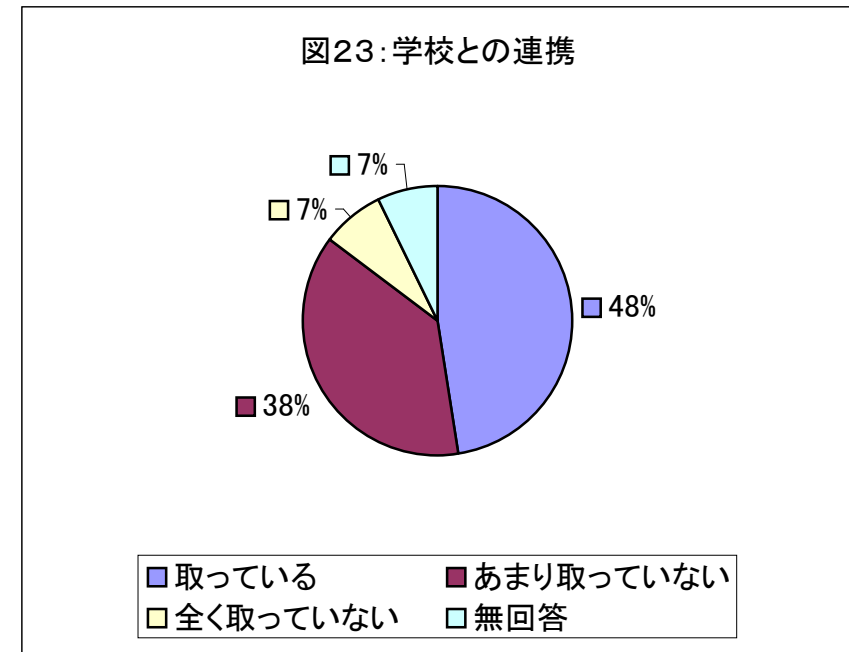
**【考察】** 教職員（学校関係者として）が指導者登録している団は非常に少なく、9割の団に教職員登録はないという結果がでた。  
この質問には、学校側との連携という意味が含まれているのだが、指導者として登録することで直接的に関与している団は無いようだ。



<学校との連携> 【図23】

学校と連絡・連携を取っていると回答したのは48%、少しは取っているのが38%でとなった。

**【考察】** 結果では、何らかの形で学校側と連携を取っている団が多いことがわかった。少年団活動と学校行事が重なることもしばしばあるようだ。  
 スポーツ少年団活動では、あくまでも学校行事を優先していただきたい。  
 少年団活動を学校側に理解していただき、相互に協力をしあうという意味でも、常に学校との連携を心がけてもらいたい。

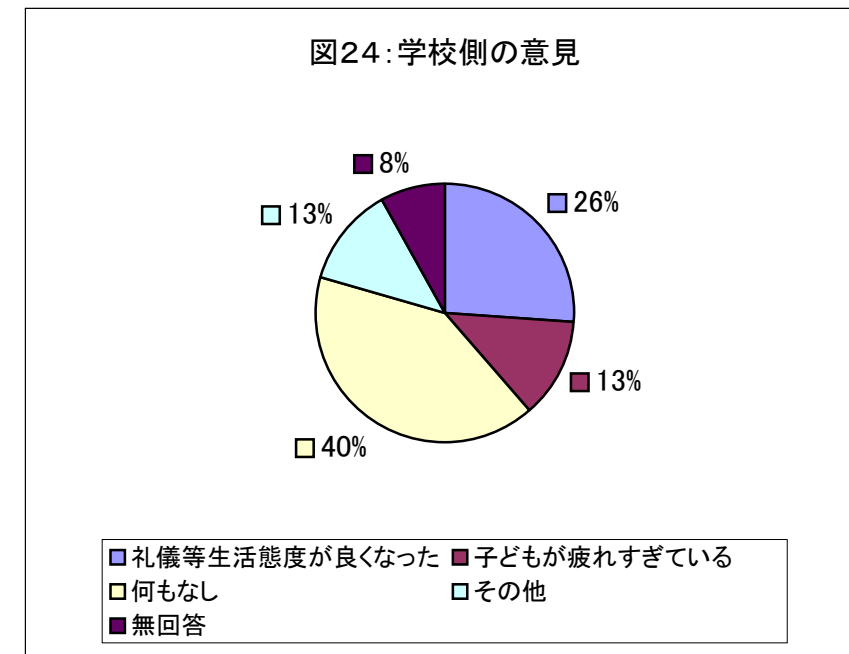


<学校側の意見> 【図24】

学校からの意見としては、「何も言われたことがない」が最も多く40%あった。  
 「礼儀正しくなった」等良い面での意見が13%あった。  
 反対に、悪い面では「疲れすぎている」との意見が26%あった。  
 その他の意見としては、以下のようなものがあった。

- 体力がついてきた。何をさせても良くできる。
- 風邪等の流行期の注意
- 大会の成績はどうか
- 挨拶、言葉遣いを一緒に注意していきましょう

**【考察】** 学校側からの意見としては、良い面もたくさんあった。  
 ここでは悪い面に注目したい。  
 最も多いのが「子どもが疲れている」というもの。  
 少年団の活動で疲労がたまり学校生活に影響を及ぼしているという意見だと思われる。  
 もちろん、1つの理由になるかも分からないが、家庭での生活も大きく関わってくると考えられる。  
 少年団の活動のしすぎという点は気をつけるべき問題であるが、子どもを育てる一番の環境は家庭であることを忘れないようにしたいものである。





(7) 保護者の関わり【図25・図26・図27】

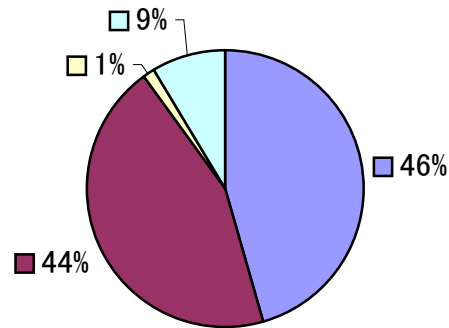
図25の「年間負担額」では1万円以下が46%、1～3万円が44%となった。

図26の「保護者の関わり」では送迎・応援が最も多く53%あった。

図27の「地域との交流」では、何も交流していないのが32%あり、何らかの活動をしている団が60%以上ある。

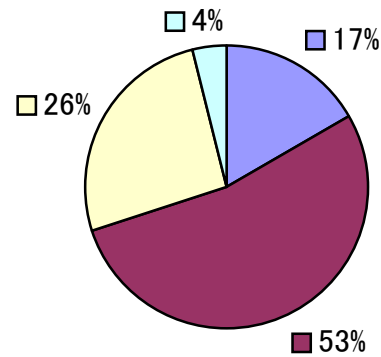
**【考察】** 活動費については、ほとんどが3万円までの負担であって、平均的だと思われる。競技種目や大会等への参加回数で差があるようだ。なお、複合団については、各競技別まで把握できていないため無回答に入っている。保護者の関わりは主に送迎や応援という内容である。中には当番制にし役割分担を決めて運営に関わっているところもある。指導者に任せきりにしないという傾向は良いことだと思うが、時間的な負担も窺える。地域との交流ではボランティア活動（奉仕活動等）を行っている団が37%、レクリエーション等が24%あった。自分の団（競技）の活動も大切だが、子どもの健全育成がテーマであるスポーツ少年団活動では、社会貢献や地域交流を積極的に行い人と人との関わりを大事に、スポーツ少年団を通じて人間の輪を広げてほしい。

図25: 団員個人の年間負担額



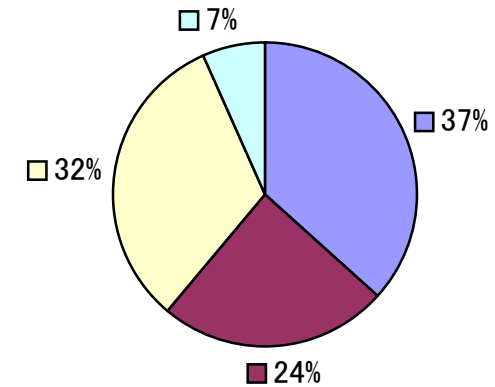
- 1万円以下
- 1～3万円
- 3～6万円
- 無回答

図26: 保護者の関わり



- 練習への送迎
- すべての送迎・応援
- 当番制で世話
- 無回答

図27: 地域との交流



- ボランティア活動を実施
- レクリエーション活動を実施
- 交流無し
- 無回答

(8) 指導者の現状

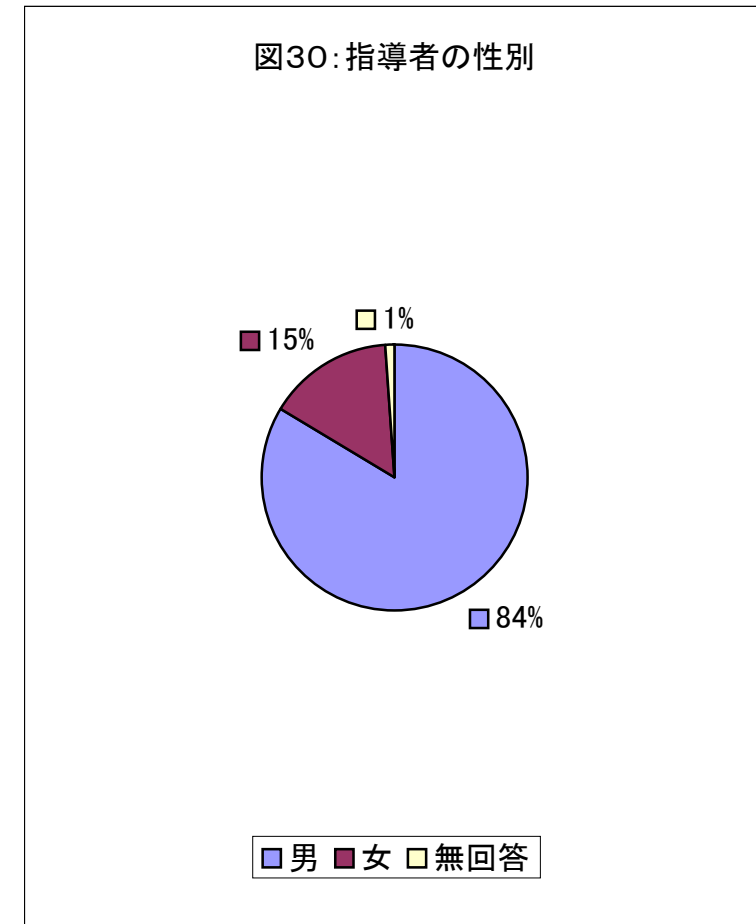
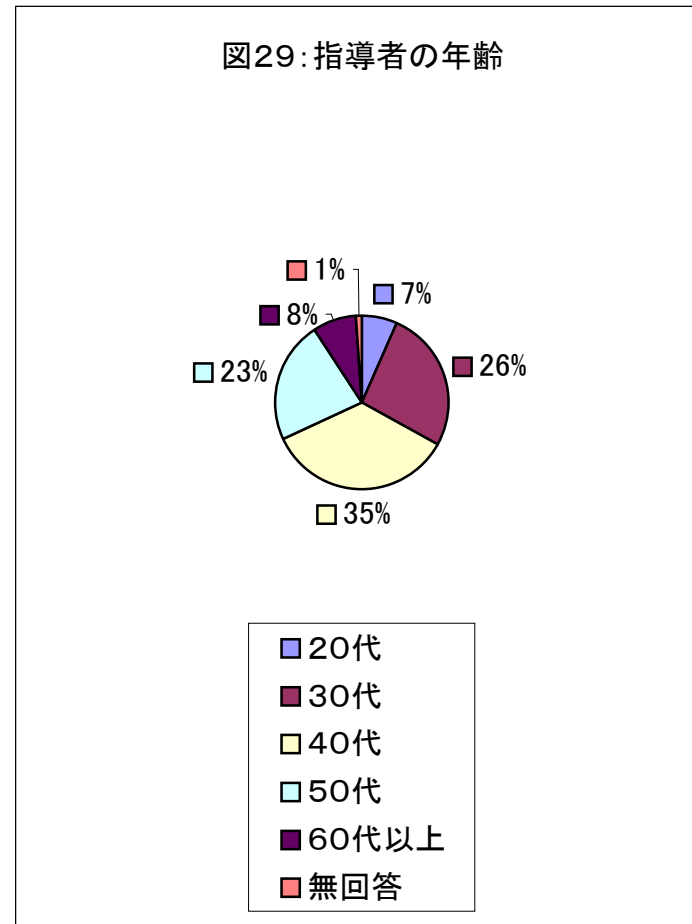
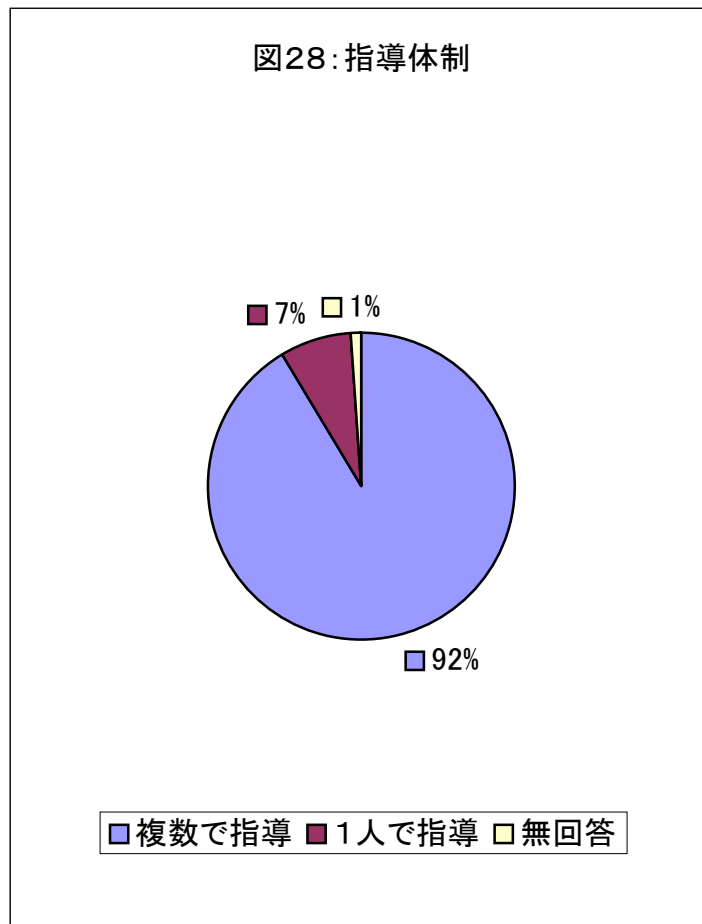
<登録指導者の分類>【図28・図29・図30】

図28の「指導体制」では、複数での指導が多く、92%あった。

図29の「指導者の年齢」では30代が26%、40代が35%、50代が23%と30代から50代で大半を占める。

図30の「指導者の性別」では、男性が圧倒的に多く84%であった。

**【考察】** 平成19年度の登録状況では、団数183、登録指導者数732名で単純に1団あたり平均4名の指導者がいることになる。指導者の年齢は30代～50代で84%を占め、割合もほぼ均等である。性別は男性が84%と圧倒的に多い。近年、どの分野においても女性の参画は重要であり役割も大きなものがある。子どもたちを育成する上で女性指導者の存在・意見は必要なものであり、各団でも是非女性指導者の登録をお願いしたい。



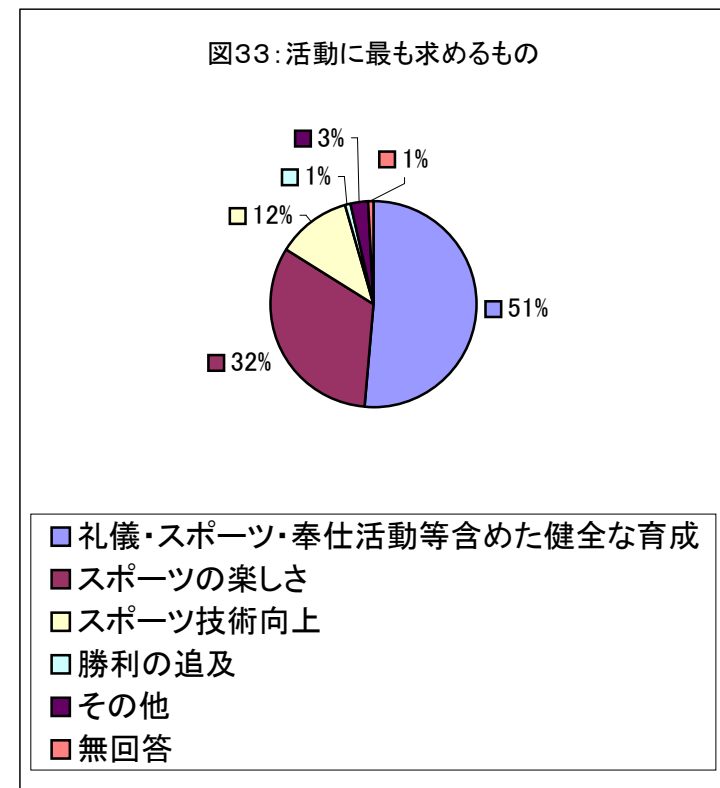
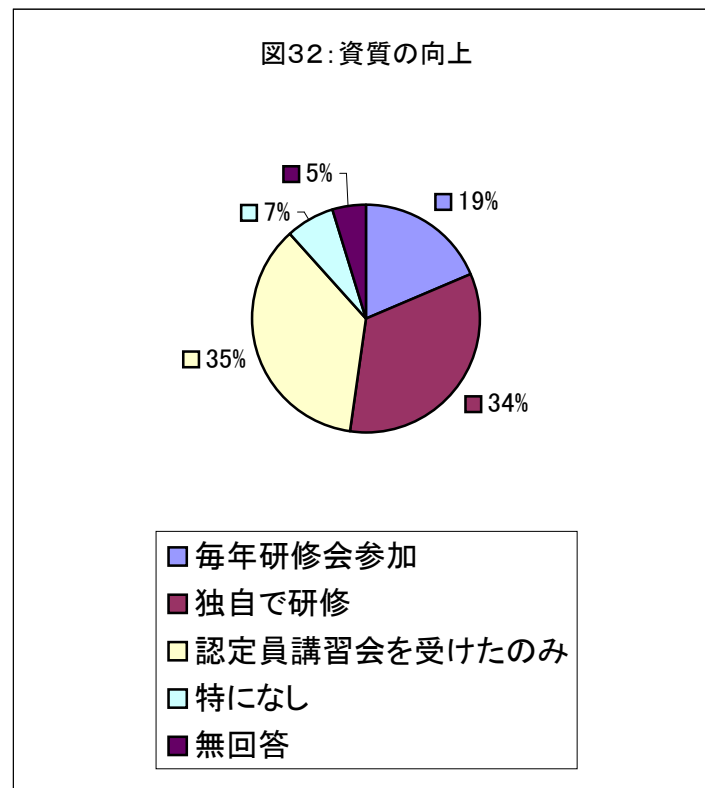
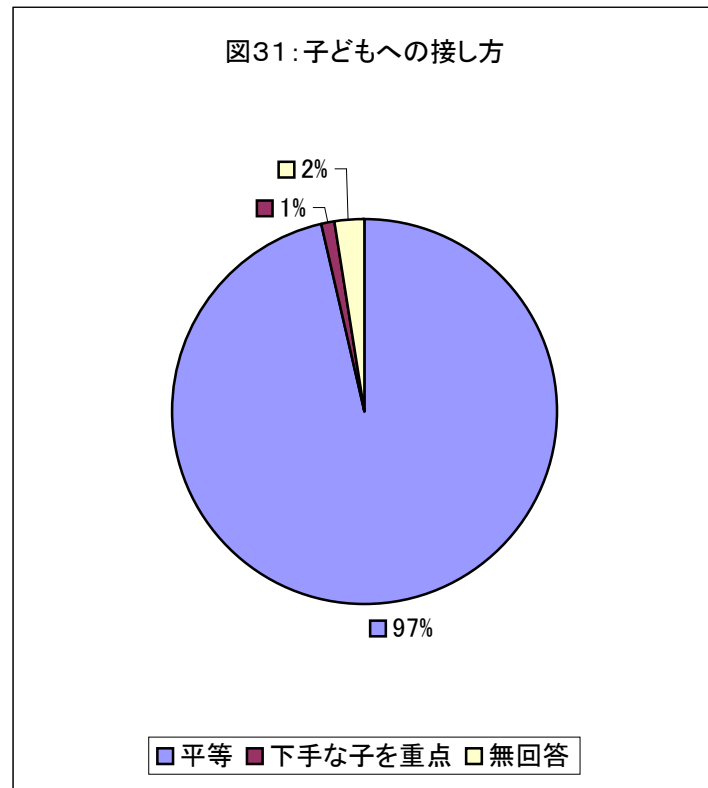
<指導について>【図31・図32・図33】

図31の「子どもへの接し方」では、平等が97%あった。

図32の「資質の向上」では、何らかの形で研修をしているのが半数以上あり、県の認定員養成講習会を受講したのみが35%あった。

図33の「活動に最も求めるもの」では、礼儀等を含めた健全な育成が最も多い51%で、次いでスポーツの楽しさが32%、技術の向上が12%と続く。

**【考察】** 子どもへの接し方ではほとんどが平等に接している。  
 指導者自身の資質の向上では、「認定員養成講習会を受講したのみ」と「とくに無し」が42%もあり、定期的な研修会等への参加の必要性を発信しなければと感じる。  
 スポーツ少年団活動をする上で最も求めるものとしては、スポーツ少年団の理念でもある「礼儀・スポーツ・奉仕活動を含めた健全育成」が半数を占めている。  
 この項目では複数回答が多かったため、「スポーツの楽しさ」「技術向上」も併せて意識しているところが多いようだ。  
 データの限りでは、「勝利至上主義」の意識はないと言ってよい。本来のスポーツ少年団活動を目指している団が多いようだ。



(9) その他【図34・図35・図36・図37】

団体活動を行うに当たって、なにかあった場合の対策・対応は大事なことである。  
 特に、大会等への送迎を指導者・保護者が行っている場合、送迎中の事故の可能性があり、また事故によって責任を問われることもある。  
 送迎は業者に依頼するか、最低でも保険加入はしていただきたい。  
 同じく、活動場所に行くための往復経路も事故の可能性があり、スポーツ少年団では往復経路も活動内容に入れるよう指導している。  
 指導者、団員を含め、事故等によるケガの保険には「スポーツ安全保険」の加入を勧めている。  
 指導者が損害賠償責任を受けた際の治療費・慰謝料等多額の出費を救済・補償できるのは「(財)日本体育協会公認スポーツ指導者総合保険」  
 で、対象には「スポーツ少年団認定員」が含まれるので、認定員のみ加入することができる。

